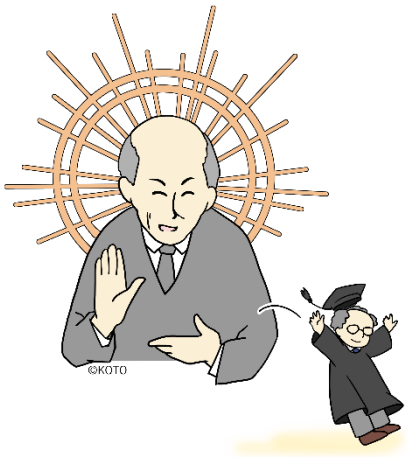
退職に際して

関西大学　社会安全研究センター　　小澤　守

今回は「安全安心」を離れて，極めて個人的な状況について述べさせていただこうと思う．読者の皆さんにはあまり興味のない話になるかもしれないことを始めにお断りしておく．この連載も既に4年目に突入しようというときになって，今さら自己紹介もないが，最初にやっていなかったので，今年3月末をもって完全に退職したのを機会に，自己紹介的な記事を書かせてもらうことにする．「完全に」というのはすでに3年前に退職し，この3年間は再雇用されていて，その期間が満了して退職したからである．再雇用期間中も大学の慣例として「教授」といってよいとされていたため肩書には社会安全学部・教授としていた．肩書がなくなる（関西大学名誉教授ではあるが）と寂しいので，学部教授会にお願いして，上記のセンターの主幹研究員を名乗っている．

著者は1950年の生まれで，神戸大学入学は1968年．入学直後に大学紛争の嵐に巻き込まれ，ほぼ9か月間，封鎖解除に至るまで，講義などできるはずもなく，仲間との討論や読書に明け暮れた．ようやく進級した工学部では夏休み，冬休み，春休みなどが短縮された．真夏の暑い日に室内おおよそ40度のなかで鍛造の実習をやったのを記憶している．当時はパソコンもITもない時代．計算は計算尺，コピーも青焼き，実験で写真を撮っても，現像定着焼付は当然自らが行った．製図板上でトレーシングペーパ上に鉛筆で製図し，仕上げとして烏口で墨入れをしたものである．烏口を研ぎすぎてさーっとトレーシングペーパが切断されたこともあった．著者の時代では教科書も専門科目になると相当に分厚く（もちろん薄っぺらなものやノート講義もあったが），通年講義であっても，教科書のすべてを受講した記憶もないが，いつの間にか全体を見ていたような気がする．現在の工学系の教科書は200ページを超えると学生に不評だそうで，出版社からも薄く，もっと薄くと要求される．単位を取るためだけのHow toもの的教科書しか世の中にないことになり，学問体系などそこのけである．講義中に聞きかじっていたことが，のちに教科書を見直した時に漸く理解できることってある．教科書とはそういうものでなければと思うが，世の中そのようには動いていない．

さて，当時の神戸大学の工学研究科には博士課程（Drコース，今でいう後期課程）がなかった．研究の面白さ，未知との遭遇を期待しての実験を行い，理論モデルの構築やその検証，その結果の論文の執筆は，明らかに自己主張の一つであり，それがやたら面白かったのだろう．大阪大学のDrコースに入学．指導教授の石谷清幹教授からは，「君は一体何がやりたいのか」と尋ねはされるが，何をやりなさいとはひとこともない．研究室の講師とも相談して，当時開発中であった高速増殖炉もんじゅの蒸気発生器や，沸騰水型，加圧水型原子炉の蒸気発生部での流動の安定性をテーマに選んだ．石谷先生と著者の研究についての話は「よし分かった」のひとことで終わり，それからの2年半はほとんど独自の考えで研究を進めた．最初の1年がほとんど終わりかけたころに漸く目指す現象が実験的に再現できてほっとした

ものである．Dr. 3年の9月初めにDr論文の原稿を持って行ったところ，「もう出すのかね」．一瞬ひるんだが「出してはダメですか」と押し返し，「ともかく読むよ」と受けてもらった．その約2時間後，「これでいい，あとは任せた」との言葉を頂いた．Drコース在学中の石谷先生の話は，エネルギー問題，学術会議での問題などなどで，少なくとも著者の研究についての話は聞いたことがない．問題点を自ら発見し，自ら解決せよというのが「任せた」の意味で，自ら学問や技術の体系を構築しなさいという指示でもあった．Drの審査が終了したのち，石谷先生と一緒に企業を回ってDr論文の紹介をした際に，最初の前置きで著者のDr論文全体を読まずとも全体像を的確につかんだ話をされていた．師匠，おそるべし．卒論でボイラの動特性を，それ以後，ほぼ一貫してボイラや蒸気発生器に関わってきた．これらも師匠の手の内であり，なかなか師匠の手のひらから出られなかった．退職を機に師匠の手のひらからエイヤーと飛び出したいとは思うが，うまく飛び出せるだろうか？